

眼鏡の聖地から「持続可能な創造都市」へ ～鯖江の“ものづくり”と“ひとづくり”の最前線～

全鍍連 情報・国際委員 黒田 優
(アイテック株式会社／福井県めっき工業組合)

福井県鯖江市。古くから「眼鏡」「繊維」「越前漆器」の三大地場産業が息づくこのまちは、今、単なる製造拠点から、若者やクリエイターが惹きつけられる「持続可能な創造都市」へと大きな進化を遂げています。

1. 「眼鏡の聖地」が守る伝統と革新

鯖江を語る上で欠かせないのが、国内生産シェア9割を超える眼鏡産業です。100年以上の歴史の中で培われた職人技は、今やチタン加工などの高度な技術へと発展し、医療や宇宙開発の分野からも注目を集めています。しかし、近年の鯖江は「作る」だけにとどまりません。職人と消費者が直接つながる工房直販や、移住した若手職人による新ブランドの立ち上げが相次いでいます。伝統を重んじながらも、既成概念にとらわれない自由な発想が、地場産業に「いきいき」とした活力を与えています。

2. 「SDGsのまち」として全国をリード

鯖江市は全国に先駆けて「持続可能な開発目標」を市政の柱に据えています。特に「市民主役のまちづくり」は、鯖江の誇るべきアイデンティティです。その象徴が「鯖江市役所JK課」や「おとな版鯖江市役所」といった

ユニークな取り組みです。行政が一方的に施策を決めるのではなく、女子高校生や現役世代の市民が「自分たちのまちは自分たちで面白くする」という当事者意識を持ち、空き家の活用やイベントの企画に携わっています。

3. 未来へつなぐ「ものづくりの心」

これからの課題は、この活力をいかに次世代へ継承していくかです。原料価格の高騰や人手不足など、地方を取り巻く環境は決して楽観視できるものではありません。近年では「RENEW（リニュー）」に代表される、工房を一般開放する体感型マーケットが定着し、県外からも多くの若者が鯖江を訪れるようになりました。

最後に、鯖江の強みは、確かな技術という「ハード」と、挑戦を後押しする寛容な市民性という「ソフト」が共鳴している点にあります。眼鏡のレンズ越しに見える未来が、明るく希望に満ちたものであるために。私たち市民一人ひとりが、このまちの価値を再発見し、発信し続けること。それこそが、鯖江を、そして地域を「いきいき」と輝かせ続ける原動力になると信じています。